

アイヌによるアイヌ語表記*

切替英雄

1997年1月

1 片仮名の使用

学童期に文字を教わる機会を逸した人が、成人したのち初めて文字を習得しようとする、かなりの困難に逢着する。街に文字が溢れているようなところで育った人でも特別の配慮のもとになくは文字の習得は難しい。また、習得に都合のよい年齢もあるらしい。

絵画や心覚えの符丁（結縄など）に始まる人類の文字使用の歴史をたどると、文字（正確に言うならば文字体系）の真の意味での創造は稀であることが分る。さまざまな言語で用いられる文字の系統をたどっていくと、数少ない起源にたどり着く。^{*1} 文字を使用する他民族の影響で、自分たちの文字を作ろうというとき、外来の文字体系を模倣しつつ、しかも自分の言語に相応しいものに作り替えていく。そのように伝播したために系譜を描くことができるのである。文字というアイデアが、何もないところに不意に生まれるのは稀なことようだ。たとえ生まれたにしても、初めから完成されたもので

* 『国文学解釈と鑑賞』第62巻1号、志文堂、1997年1月、99-107。改稿2016年1月24日

*1 河野六郎 1994『文字論』三省堂 124。西田龍雄 1981「世界の文字」『世界の文字』講座言語 第5巻大修館書店 3-41。

あったとは思われない。文字言語は音声言語ほどには人間にとって自然なものではないらしい。

アイヌにはみずからの言語を文字で綴る習慣がほとんどなかった。北海道のアイヌが文字になじむようになったのは、日本語を書いたり読んだりするためであって、アイヌ語のためではなかった。アイヌの児童に対する文字教育は、北海道が幕府の直轄地となり、幕府の対アイヌ政策が非干渉主義から同化主義に転じたのちに始められたようであるが、*2 組織的に行われるようになったのは、明治になってからである（千島・樺太のアイヌの文字使用の状況については詳しく知らないで、ここでは触れない）。明治・大正期のアイヌの子供達の多くは、アイヌ語と日本語のバイリンガルであったと推定されるが、文字は日本語の一部として教室で教わったから、それをを用いてアイヌ語を表記しようとするには、ある種の飛躍が必要であったろう。仮名を日本語から引き離してアイヌ語に適用するという、いわば仮名の抽象化を今飛躍と言ったわけであるが、子供の中には、ひょっとするとこれをなした天才がいたかもしれない。しかし、同化主義が北海道に住む人々の心を厚くおおっていた時代であったから、そのような試みがあったとしても定着することはなかった。まして、アイヌ語そのものの存続さえが危ぶまれる状況であった。

少数民族の言語は、大言語とのバイリンガリズムが一般化したときに存亡の危機を迎える。幼児期までにアイヌ語の基礎が形成されたとしても、そのような情勢のもとで、学童期以降、子供たちがアイヌ語に心を閉ざすようになれば、アイヌ語能力の発達が阻害される。おそらく、現在六、七十才代以上のアイヌのうちかなりの人は、日本語のモノリンガルのように見えても、アイヌ語の根幹部分が心のどこかに眠っている潜在的バイリンガルである。しかし、中には成人してからもずっとアイヌ語を忘れなかった人がいる。こ

*2 高倉新一郎 1972『アイヌ政策史』新版 355-356。幕府が北海道を直轄地としたのは、1807-1821, 1854-1868 の間。

ういう人々の間にアイヌ語を書く独自の試みがあったとすれば、それは極めて尊いことである。旭川の近文（ちかぶみ）出身の砂沢クラ（1897-1990）は、たぶんほぼ独力でアイヌ語仮名表記法を作りあげ、それを自分で使用した言語的天才の人である。

砂沢氏のアイヌ語片仮名表記の特徴を少し見てみよう。以下、砂沢氏の1983年の著書『私の一代の思い出 クスクップオルシベ』（みやま書房）から資料を得ることとする。この自叙伝は、1967年、北海道大学の池上二良教授の勧めによって書かれたものである。なお、砂沢氏が表記にさいして平仮名ではなく、片仮名を用いたのは、おそらく、片仮名の方により親しみがあつたからであろう。^{*3} また、刊行本では横書きになっているが、原稿はもちろん縦書きで書かれている。

アイヌ語では、次の音が用いられる。

母音	i	e	a	o	u
子音	唇音	口蓋音	軟口蓋音	声門音	
閉鎖音	p	t	k	ʔ	
摩擦音		s		h	
破擦音		c			
弾き音		r			
鼻音	m	n			
半母音		y	w		

音節には子音+母音（開音節）と子音+母音+子音（閉音節）の2種がある。仮名表記に関連して以下のことが注意される。

- 有声と無声の対立がない。
- 口蓋化・非口蓋化（拗音・直音）の対立がない。

^{*3} 国語教育研究所編 1991『国語教育研究大辞典』722 では、明治36年（1903）から片仮名先習が確立されたとする。

- 音節末で多くの子音が対立する。特に弾き音が現われる。
- 音節末の子音の出わたりが顕著ではない。特に閉鎖音は破裂を伴わない。
- tu、we、ye など、日本語にはない音連続がある。

砂沢氏は、アイヌ語の

ka ki ku ke ko

に対して

カ キ ク ケ コ

を当てるが、

pa pi pu pe po

に対しては濁音の

バ ビ ブ ベ ボ

を用いる（例 バイカラ paykar [paɰkar] 「春」 r は音節末の弾き音）。我々ならば半濁音のバ、ピ、プ、ベ、ポと書くところである。アイヌ語の音節頭の閉鎖音は帯気性の著しくない（しかし無気音となることは稀な）無声音であることが多い。また、特に唇閉鎖音は有声音になることも多い。ここで、カなどの清音の仮名は特に「無声子音+母音」を表しているわけではなく、また、バなどの濁音の仮名は特に「有声子音+母音」を表しているわけではない。これは私たちアイヌ語研究者が用いる記号にも言えることで、p, t, k などのローマ字は何も無声子音を示すために使っているのではない。

秋を意味する cuk [ɰuk] は、ツック、ヅック、ヅックと書かれる。なぜこれがチュックないしチュックとされなかったのか検討しよう。我々であれば、cu [ɰu] に対してはチュを使いたいところであり、事実、現在普通に行

われるアイヌ語仮名表記ではチュが用いられている (cuk はチュクと書かれる)。砂沢氏は一般に拗音の仮名は使わない。その背景には、アイヌ語に口蓋化・非口蓋化の対立がないことがある。破擦音を含むことで共通するチュとツのうち、直音のツが用いられたのは自然なことである。なお、この選択は、アイヌ語の破擦音が日本語のチュの子音よりも調音点がやや前寄りであることをあるいは反映しているのかもしれない。しかし、日本語のツほどには前寄りではない。ツと並んで濁点、半濁点付きのツが用いられているのは、この微妙な調音点のずれと関係がある。なお、ヅという字種がアイヌ語の表記のために使われた最も古い例は、松前藩の通詞、上原熊次郎の『藻汐草』(寛政四年跋)に見られるが、これは tu を表すものであった。^{*4}

また、「散らす」を意味する cari [tʃari]、魚を意味する cep [tʃep]、お金を意味する ʔicen [ʔitʃen] は、我々ならばそれぞれチャリ、チェップ、イチェンとしたいところであり、現在普通に行われている表記でもチャやチェが当てられる(チェップはチェブと書かれるのが一般的)。しかしながら砂沢氏はザリ、ゼップ、イゼンと書く。拗音の仮名を用いないとすれば、チャやチェと類似する破擦音を示しうるのはザとゼしかない。日本語のザ行の子音は、語頭にあつて(有声)破擦音である。砂沢氏はこの性質をアイヌ語の破擦音に利用したのである。

音節末の子音では、p t k s r m n を書き分ける必要がある。k についてみると、

ラボック	rapok	「(している) さいちゅうに」
ラボック	(同上)	
ヤツネ	yakne	「もし(する)ならば」
アシッキネン	ʔasiknen	「五人」
アシキネン	(同上)	

^{*4} 金田一京助 1913 「蝦夷語学の鼻祖上原熊次郎とその著述」『金田一京助全集』第6巻2。

などさまざまな書き表し方が見られる。現在ではそれぞれラボク、ヤクネ、アシクネンのように「小さなク」で書かれるのが普通である。

先に、pa などに対して濁点付きのハ行の仮名を用いること、またその意義について述べたが、フについては半濁点付きのものもあり、これにもまた日本語の慣用とは異なる価値が与えられている。

アフツプ	ʔahup	「入る」
アップカシ	ʔapkas	「歩く」
アップ、カシ	(同上)	
ネツプカクエ	nep ka ku ye	「私は何も言わない」

これらの ツプ は、音節末の破裂を伴わない唇閉鎖音を表している。語中の音節末閉鎖音には3つ目の例に見られるように読点がしばしば付けられるが、これは、無破裂性を印象付ける意図で加えられたものであって、語構成要素の境界を表すものではない。要するにツプは音節末の唇閉鎖音のために用いられているのである。このプは小さく書かれることもある。砂沢氏の著書の副題にある

クスクツプオルシベ
ku sukup ʔoruspe

の半濁点および濁点の使われ方を見ていただきたい。なお、ネツプカクエのエは ye を意図したものである。砂沢氏は ʔe をエと書くのに対して、we、ye には、エを当てている)。

tu [tu] に対しては、

ヅミ	tumi	「戦争」
ヅミ	(同上)	
ハンベ ヅラ	hampe tura	「父とともに」
トット ヅラ	totto tura	「母とともに」

のように2つの表記法が競合している。ツという字種は、先に述べたとおり cu [tʃu] にも用いられることがあるが、字形、用字法ともに砂沢氏の独創であるか、誰かに教わったものであるかは分らない。

また、右に掲げたランケ tu ック (Ranketuk 人名) のように、ローマ字の tu が当てられることもある (原稿どおりに縦書きで示した)。この tu が筆記体 *tu* で書かれていることは注目に値する。御本人によれば、若き日の知里真志保から教わったものとのことであるが、2つの字母からなるものであることをご存知なかったようである。ブルームフィールドは、アメリカインディアンの言語の一つ、フォックス語に英語の筆記体にもとづいた音節文字体系がいくつかあると述べているが、興味深い平行事例といえる。^{*5}

ラン
ケ
tu
ク

2 ローマ字の使用

ローマ字、ロシア文字などのアルファベット (ここでは子音字と母音字を区別する単音文字体系) はたった一つの淵源、すなわちギリシャ文字に遡るものである。これは、音節を子音と母音に分けて示す単音文字体系の発明が音節文字 (子音だけを明示する体系も含む) の発明よりさらにずっと困難なものであったことを物語っている。単音文字への飛躍はギリシャ人の天才を待たなければならなかった。

まったく根拠のないことと思われるが、ローマ字教育は英語の学習の妨げになるという説が唱えられることがある。そのためだろうか、残念なことに現在ではローマ字で日本語を読み書きするための教育が小学校でほとんど行われなくなってしまった。そのため、日本語の文法が体系的に教えられることもない。子供たちの多くはアルファベットの原理も文法というものも知らないまま中学生になる。英語の学習を中学入学後の最初の一、二ヵ月で放棄

^{*5} Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. 288.

してしまう生徒は少なからずいると思われるが、このような生徒がアルファベットの原理と文法の概念のわからないまま、さらに上級学校へ進学するという事態がもう既に始まっている。また、仮に英語の学習がある程度良好に進んだとしても、英語の綴りはアルファベットの原理から甚だ逸脱しているから、英語の学習を通じてアルファベットの原理に到達できない生徒がいる可能性がある。アイヌ語の ka の表記をいくら教えても、いつまでも ca と書き誤り、アイヌ語のザ [tʃa] を ca と綴るよう教えても、それをいつまでも [ka] と読む学生は、ca が日本語の「カ」に相当する音節文字としてのどの言語にも通用すると誤解しているのかもしれない。

このように現在においてもなかなか馴染まれないローマ字で自らの言葉を書いたアイヌに金成まつ（かなりまつ）と知里幸恵（ちりゆきえ）がいる。金成まつはどのようにしてローマ字を獲得したのであろうか。「明治二十五年聖公会の牧師、英人ネトルシップの函館なる伝道学校が、アイヌの子弟の俊英凡そ五十人を選んで教育した時、その中に女性が五人おり、女史十八歳、妹十二歳をもって選ばれてその中にあり、在学の足掛け七年、明治三十一年、二十四才で卒業して、妹と共に日高の平取の教会にブライアント女史の下に勤務する（後略）」*6 とある十八才の女性が金成まつである。金成まつはこの学校でローマ字を習った。「私が函館の学校に行けたのはバチェラー先生が推薦してくれたからです。函館の学校でローマ字を習ったから文字を持たないアイヌの私にもユーカラが書けたんです。ですからバチェラー先生は私の恩人です。」と金成まつ自身が語っている*7

バチェラー（1854-1944）とは、アイヌに対するキリスト教伝道とアイヌ語の研究に生涯をかけたイギリス人である。金成まつが学んだ学校は、1892年バチェラーにより設立された（校長はネトルシップ）。アイヌの子弟に「尋常小学校の課程のほかローマ字綴りおよび聖書を教え」するための私立学校で

*6 金田一京助 1959 『アイヌ叙事詩ユーカラ集』第1巻 三省堂 5-7.

*7 仁多見巖 1965 『ジョン・バチェラーの手紙』山本書店 80.

あった*⁸。金成まつが習ったというローマ字が英語を通してのものであったのか、あるいはアイヌ語や日本語のローマ字綴りであったのかははっきりしないが、アンデレスという伝道師が1891年（明治24年）、釧路の春採（はるとり）の説教所を視察したおりの報告に「ミス・ペインが彼らにバチェラー氏のマタイ伝のアイヌ語訳と若干の宗教冊子を読み、さらに賛美歌を教えています」*⁹とあるから、アイヌ語で伝道できる力を養うべく、バチェラーの翻訳したアイヌ語の聖書、祈祷集、賛美歌などが教授されたのかもしれない。金成まつは妹のなみと分れて住むようになってからも「ローマ字書きの音信」を絶やさなかったようだが、*¹⁰ おそらくそれはアイヌ語と日本語をローマ字で綴った手紙であったろう。

金成まつアイヌ語表記は『アイヌ叙事詩ユーカラ集』（第1巻－第7巻三省堂）に見ることができるが、それは1928年以降、知里幸恵の表記法を一部採用して書かれたものであるらしい。これについては後で触れる。

知里幸恵（1903－1922）は、金成まつ妹のなみの娘であり、アイヌ語学の知里真志保はその弟である。幼いときから父方、母方の両祖母に親しんで育ち、6才になってからは両親と離れ旭川の近文（ちかぶみ）に移り、母方の祖母金成モナシノウクと叔母まつに育てられた。祖母、叔母ともアイヌ口承文芸の優れた伝承者であった。*¹¹ 有名な『アイヌ神謡集』（1923）は、13編の叙事詩をローマ字で書き表し、それに美しい日本語訳を付けたもので、19年の短い生涯を閉じた翌年に金田一京助の手により世に出されたものである。

知里幸恵と金田一との出会いは1918年の近文でのことであったが、そのおり、金田一が「アイヌの神謡・詞曲の貴重な文学であることを切言し、生き残る叙事詩人をたずね探して、どうかして壊滅を未然に防ぎ止めたいもの

*⁸ 仁多見巖 1965. 117.

*⁹ 仁多見巖 1965. 114.

*¹⁰ 金田一京助 1934 「北の人」『金田一京助全集』第14巻 51.

*¹¹ 藤本英夫 1973 『銀のしづく降る降る』新潮選書。

だとかねての素志」を述べたところ、幸恵は「女ながら、私も生涯をその道にささげたくなりました」と答えたと言う。^{*12} 知里幸恵の残したアイヌ語のノート^{*13}は、その言葉どおりのことが行われたことを示している。ただ、金田一の熱誠がよほど強く作用したためか、幸恵の残したものの中に砂沢クラ氏のような日常語で書かれたテキストがなく、すべて口承文芸作品であることは、私には惜まれる。知里幸恵の出身地、胆振地方の日常語の資料が知里真志保の文法書に散見するにとどまるからであり、また幸恵の人柄をアイヌ語を通して知りたかった気持ちが残るからである。幸恵には、いわゆる「言文一致」でアイヌ語を綴るといふ発想がなかったのかもしれない。あるいはそのようなものに価値が感じられない時代であったのかもしれない。^{*14}

知里幸恵のローマ字表記のすばらしさは自身の言語学的天才によるものであることに間違いはないが、それに加えて叔母から受けたであろう教育、バチェラーのアイヌ語の著書などに育まれたものと想像される。

金成まつ、知里幸恵のアイヌ語ローマ字表記はバチェラーの流れを汲むものであることは明らかである。バチェラーの表記法には、アイヌ語の ci [tʃi] を chi で表し、口蓋化した s を sh で表すなど日本語のヘボン式ローマ字表記とよく似たところがある。この方式は、金成まつ、知里幸恵にとどまらず、金田一京助とその弟子たちにまで続く長い伝統となった。

金成まつテキストには無声の閉鎖音字と有声の閉鎖音字の混用が目立つが、これは独力でローマ字表記法を作り上げたというよりも、むしろバチェラーの影響のもと、函館の学校でアイヌ語ローマ字表記を習得した証拠となるのではないかと思われる。バチェラーは、有声音と無声音についての認識

^{*12} 金田一京助 1934「北の人」『金田一京助全集』第14巻 58-59.

^{*13} 知里幸恵の遺稿目録は、切替英雄 1989『アイヌ神謡集辞典』北海道大学文学部言語学研究室 373-377.

^{*14} 池上二良先生は、私に「アイヌ語は、まず日常語を調べなければならぬ」とおっしゃったが、砂沢氏に自伝の執筆を勧められたのは、そのような思いがあったためである。アイヌ語を見る者の目は、金田一から40年の年月を経て大きく変わった、と思われる。

は不完全であって、たとえば「二つで一組をなすもののうちの片方」を意味する ?arke に対して arage と arake の両形を辞書の見出しに立てている。当時、文字や印刷物が強い権威を持っていたことを知らなければならない。知里幸恵の表記にこのような混用が少ないのは、バチラーの権威に妨げられることなく言語の構造を客観的に見る才能があったからであろう。

さて、今見た ?arke には、音節末の r [r] が含まれている。この音は、日本語の r と同じく舌尖の急速な上下運動からなる。舌尖は歯茎を叩いたあと再び元あった位置近くに戻る。舌全体としては直前の母音に近い構えを回復する。声帯の振動はまだ続いているから、次の音節に移る前に直前の母音に類似した母音が繰り返されることになる。この r の後で繰り返される母音が意図された母音ではないことに明瞭に気付いた人が知里幸恵であり、今日行われる arke などの表記も幸恵の表記に由来する。金田一の表記には幸恵に出会ってからしばらくは、音節末の r について次のような過った認識が認められる。

インカラナワ inkar'an awa 「われ見れば」*15 (仮名表記、ローマ字表記、訳ともに金田一)

このアポストロフィーは何を示しているのだろうか。金田一は、当初、?inkar 「見る」を inkara と理解していた。そしてこの動詞が一人称の人称接辞 -an をとると、末尾の ra が母音を失い、後に続く -an とともに ran という音節を形成すると考えた (in|ka|ran)。上の例ではさらに接続助詞の awa が続くので、in|ka|ra|na|wa のような音節の連続体になる。人称接辞の前のアポストロフィーはこの「母音脱落」を表す省略符である。*16 金田一は後に「r 音に終わる音節の存在は故知里幸恵女史が初めて説いたところである。それはバチラー辞書の二版を所持していて、その中の次の類の語をば一一こくめい

*15 金田一京助 1923 「アイヌ聖典」『金田一京助全集』第 11 巻 27.

*16 金田一京助 1931 『ユーカラ研究』II 東洋文庫 16.

に終りの母音を抹消していたものだった」と述べて、kor「持つ」、kar「造る」、mokor「眠る」などをその類のものとしてあげている。^{*17} バチェラーの辞書に koro、kara、mokoro とあるものである。金成まつの、自身が伝承するユーカラのローマ字化は知里幸恵没後、いわば姪の意志を継いで行われた大事業であったが、幸恵以前の表記法がところどころに残っている。

『国文学 解釈と鑑賞』第 62 巻第 1 号 志文堂 1997 年 1 月 99-107

2016 年 1 月 26 日改稿

^{*17} 金田一京助 1960 「アイヌ語学講義」『金田一京助全集』第 5 巻 152-153.